

## 飛鳥寺同範瓦二題

**飛鳥寺と新堂廃寺の同範垂木先瓦** 飛鳥寺の垂木先瓦は4種類ある。『飛鳥寺発掘調査報告』（奈文研学報第5冊1958年）では、これらを「瓣の反りの大きい素瓣九瓣と六瓣のもの、山田寺式軒丸瓦の内区を採ったもの」および「軒丸瓦Ⅲ型式の内区のみを用いて」垂木先瓦としたもの、と報告した。本文中に型式番号は記載されていないが、「第3表」（34頁）には、「種Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ」の記載がある。今回、記述の便宜を計るため、Ⅰ型式：素弁九弁、Ⅱ型式：素弁六弁、Ⅲ型式：軒丸瓦Ⅲ型式の内区を利用したもの、Ⅳ型式：弁中央に凸線をもつ八弁、と型式設定する。うち、素弁九弁Ⅰ型式（図1中央）の同範品が大阪府富田林市新堂廃寺でみつかった。

新堂廃寺は、石川左岸の丘陵裾に位置する飛鳥時代創建の寺院跡である。1959年と翌年の発掘調査により、塔と金堂が南北に並び、金堂の北と西にも基壇建物を配置する伽藍が確認された。藤澤一夫氏は一塔三金堂の伽藍とみる。また、藤澤氏が推定した寺号・烏舎寺は、百済の都扶余扶蘇山上にあった寺院名を踏襲したもの（浅野清・坪井清足・藤澤一夫『河内新堂・烏舎寺跡の調査』大阪府文化財調査報告書第12輯 大阪府教委 1961年）。

この調査では3種の垂木先瓦が出土したが、問題の垂木先瓦はこの中にはなく、1995年に実施された推定寺域北側の調査で出土した。概要報告書に「I C01素弁蓮華

文」とされた垂木先瓦がそれ（図1左）。これと同範で、釘孔が貫通せず裏面に丸瓦？接合痕跡を残す「I A01素弁（9弁）蓮華文軒丸瓦」（図1右）もある（井西貴子『新堂廃寺発掘調査概要』大阪府教委 1996年）。

飛鳥寺垂木先瓦Ⅰ型式は、直径14.6cm、中房での厚さ1.6cmあり、側面と裏面をヘラケズリ調整する。新堂廃寺例は、直径14.5cm、厚さ1.8cm、調整も同じ。いくつかの弁の歪みに加え、瓦当面全体に残る作範時のノミ跡が全く一致するので両者は同範。製作技法および胎土焼成にも違いは認め難く、同一生産地から二寺への供給とみてよい。石川中流域での飛鳥寺同範瓦は初出で、この地域での寺院建立に、蘇我氏と飛鳥寺が関与していたことを推測させる資料となろう。（同範認定にあたり、大阪府教委の井西貴子氏・広瀬雅信氏の協力を得た。）

**飛鳥寺禅院の軒瓦** 白雉4年（653）入唐、玄奘三蔵に禅定を学んだ僧道昭。帰国後、彼は飛鳥寺の東南の隅に禅院を建てて住み、また天下を周遊して各種の土木工事をなした。文武4年（700）、齢72歳にして繩床に端座しつつ入寂したのもその禅院。（『続日本紀』文武4年3月10日条）。禅院は平城京遷都に伴い、飛鳥寺とは別に和銅4年（711）右京四条一坊に移り（薬師寺『仏足石記』）、後に禅院寺とも称される。道昭が将来した多数の禅院寺所蔵経論は、「書迹嗜好、錯誤あらず」と有名だった。

道昭創建の禅院は永く所在不明だったが、1979年に飛鳥寺南門東南方の南面築地外で7世紀後半に造作された掘立柱の塀や建物が見つかり、禅院の一郭ではないかと推測された（『藤原概報9・10』）。その後、1992年に中心

図1 同範垂木先瓦（中央：飛鳥寺、左右：新堂廃寺 1：3）

図3 平城京右京三条一坊  
十四坪出土軒瓦 1:6

図2 飛鳥寺禪院の創建軒瓦 1:6

伽藍の東方で7世紀後半に建てられた礎石建ち基壇建物がみつかった。建物方位は、中心伽藍ではなく東限塀と揃う。西側に築地塀があり、一院をなしている。出土した瓦も中心伽藍ではめったに出土しないもので、単弁のXIII型式と複弁のXVII・XVIII・XIX・XX型式に三重弧紋軒平瓦が組む(図2)。丸瓦は竹状模骨丸瓦、平瓦はタテ縄叩き桶巻き作り。この礎石建物も寺地の東南隅にある(飛鳥寺1992—1次調査『藤原概報23』)。

いずれの調査地が禪院か。糸口は意外な方面からもたらされた。1993年に奈良市教委がおこなった平城京右京三条一坊十四坪西辺の調査(平城京第291次調査)で、13世紀後半に廃絶した井戸から、飛鳥寺XVII型式軒丸瓦と三重弧紋軒平瓦、それに竹状模骨丸瓦が出土した(図3)。これらの瓦は平城京で出土したことがなかった。出土地の右京三条一坊には寺の所在を確認できない。しかし、三条大路を隔てた南は右京四条一坊。まさに、禪院の地だ(原田憲二郎「平城京出土の飛鳥寺軒丸瓦と「竹状模骨痕」をもつ丸瓦」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1994』1995年)。飛鳥寺1992—1次調査地が禪院の一郭となれば、その移転先の近辺から禪院創建瓦が出土するのも腑に落ちる。

軒丸瓦XVII型式はこの他、奥山鹿寺(明日香村)、姫寺跡(奈良市)、高田鹿寺(桜井市)と横大路(橿原市)に同範瓦がある。横大路の同範例は下ツ道との交差点から西約300mの路面上に掘られた土坑から出土した。土坑の底に葉っぱを敷き、底に孔をあけた土師器鍋を置く。その上に曲げ物の側板をのせ、軒丸瓦(飛鳥寺XVII型式)の瓦当部を紋様面を上にしてのせ、さらに石でこれらを固定する。調査者の今尾文昭氏はこれを横大路に対する地鎮め祭式の遺構と認めている(今尾文昭「橿原市新益京横大路発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報 1992年度』

1993年。今尾文昭「新益京の鎮祭と横大路の地鎮め遺構」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 1994年)。

当時これらの鎮祭には陰陽師が関連していた。『日本書紀』持統6年(692)2月11日条にみえる陰陽博士沙門法蔵・道基は陰陽僧であろう。道昭自身も出自は土木技術に長けた船連。宇治橋建設は『続日本紀』編纂者の一人で同族の菅野真道の仮託としても、各地で鑿井や港湾・橋梁工事などに関与したことは彼の墓伝にみるとおり。その技術の一つに陰陽道があったとすると、横大路の鎮祭に用いられた軒丸瓦が禪院創建軒瓦の一つだったことも、偶然ではないように思える。

大和以外で、禪院推定地と同範関係をもつのが摂津の梶原寺(大阪府高槻市)である。ここからはXVIII型式が出土し、最近、梶原瓦窯でも出土した。今、にわかには禪院と梶原寺をつながく赤い糸を指摘することはできないが、梶原寺が山陽道に面して建ち、東に山崎津を控えた立地であることは、注意してよいだろう。山崎津には天平3年(732)行基開基と伝える山崎院があったが、周辺からは7世紀代の瓦も出土し、寺院としてはそれ以前からあったようだ(山崎庵寺)。行基は道昭を師とし、二人の密接な関係はその業績にもあきらか。山崎津・山崎院と行基との関係は遡って道昭の時に始まったもので、梶原寺と禪院との瓦の同範関係もそれにちなむ、とは想像にすぎないだろうか。飛鳥寺東南隅の禪院に関わる同範関係は、少なくとも飛鳥寺がもっていたそれまでの、またそれ以後とも全く独自の広範囲にわたるものである。それは、「天下の行業の徒、和尚に從ひて禪を学びぬ」とある墓伝の一文を髣髴とさせる。禪院が平城遷都にともない元興寺から離れたことの原因はこのあたりにも胚胎していたのだろう。(花谷 浩/飛鳥藤原宮跡発掘調査部)